

私が思う 30 年後の植物科学

大隅良典

私が大学院を卒業し、酵母の研究を始めた頃、植物学会は植物分野の親学会的な役割を担っていたので、酵母の研究者もバクテリア研究者も細胞壁があると言う共通点からか植物学会に参集していた。その後植物学会の主体が高等植物に徐々に集中して行ったのは時代の流れとして当然のことかも知れない。しかしこの植物学会のもつ多様性は非常に誇るべき点であると思う。日本には理学をベースにした微生物研究者が集合する場がない。さらに今日のゲノム科学の進歩によって、高等植物であればシロイヌナズナという制約も取り払われた。様々な植物が研究対象にできる時代を迎えたに違いない。このような状況からも植物学会が生物の多様性を研究する中核になることが重要な使命だと思っている

第二に分子生物学の進展は素晴らしい成果を生み出したが、一方で研究が画一的になる弊害も生んできた。生物の持つ素晴らしさ、面白さ、進化の過程を知る研究が大切な時代を迎えていると思う。

第三に近年植物科学者は植物の特異性を強調することで植物研究の存在意義を強調する傾向が強かったように思う。植物をもっと生物学の中に位置づける努力、植物の世界に閉じない視点があって欲しいと思う。

以上を踏まえても、私にはもうこの世にはいない 30 年後の植物科学を見通せる程の卓見はない。以下は私の願望である。

人間が動物の 1 つの種であることは紛れもないことだが、最近の若者の中には植物を単に環境を構成する要素だという意識が強くなっていないかと危惧する。野原で遊んだ経験が少なくなって、野原の植物を一つ一つの生命として見つめる視点が薄くなっているように思う。食料、環境問題など今後植物が大きくクローズアップされる時代が来るに違いないが、まだ未知の世界が大きく広がっているという謙虚な態度を持っていたい。

野原で数メートル四方を区切って、そこにどれほど多様な植物、小さな動物たち、それに莫大な数の微生物が互いに相互作用をして生きているか、その様を理解してみたいと思う。社会的に解決を迫られている課題の解決は大切な視点だが、地球という限られた惑星における生物の全体を見通した、植物科学が発展することを強く望んでいる。